

タイムスケジュール

5月 <救助チーム>

12 (月)	14:28	地震発生	
15 (木)	正午過ぎ	JDR 派遣決定	
		第1陣 (32人)	第2陣 (29人)
15 (木)	17:00	結団式	
	18:29	成田発	
16 (金)	02:23	成都着 (北京経由)	
	10:00	青川県閬州鎮到着、現場調査開始	11:30 結団式
	15:30	青川県喬州鎮到着、活動開始	13:17 チャーター便にて成田発 17:55 成都着、喬州鎮へ移動
17 (土)	07:25	母子の遺体を発見	
	11:35	喬州鎮での活動終了	
	12:20	第2陣と合流	
	23:45	北川県北川第一中学校に到着	
18 (日)	00:45	北川第一中学校で現場調査、捜索活動	
	08:00	17人は北川市街地の活動サイトへ	
	20:00	北川第一中学校での活動終了	
	23:00	北川市街地での活動終了	
19 (月)	08:00	活動再開	
	08:30	安全面から活動中止を中国側が要望、活動終了	
	18:30	成都に移動	
20 (火)	四川省副省長表敬訪問、隊員のメディカルチェック など		
21 (水)	03:18	チャーター便にて成田発	
	08:56	成田着	
	09:45	解団式	

5月 <医療チーム>

20 (火)	18:25	チャーター便にて成田発
	22:50	成都着
21 (水) ~ 31 (土)	成都市内の華西病院で活動	

6月

1 (日)	テント撤収、四川省関係者への報告会 など	
2 (月)	08:00	成都発
	20:20	成田着
	21:00	解団式



JDR救助チーム
 海外の救助隊として初めて
 中国・四川に飛ぶ

2008年5月12日14時28分
 (現地時間)。マグニチュード7.9の地震により、中国の広大な大地が激しく揺れた。震源地は



最初の活動サイトとなった集合住宅のそばでは、がけ崩れが発生しており、夜通し緊迫した状態が続いた

被災地に笑顔を取り戻すために

2008年5月12日、中国四川省でマグニチュード7.9の大地震が発生した。JICAは5月15日～6月2日にかけて、国際緊急援助隊(JDR)の救助チームと医療チームを現地に派遣。一人でも多くの命を救おうと、約3週間にわたり活動を行った。



がれきの下の人を救うため、隊員は手作業で丁寧に掘り起こしていく

務省消防庁、海上保安庁の担当者、直ちにメンバーの召集を開始する。成田空港集合は約4時間後。その時、JDR事務局の市原正行・業務調整員らは、空港近くの倉庫から搬出する資機材の手に配に追われていた。広尾病院救命救急センターの中島康さんは「3年前にJDRに登録したときから、次は自分が行くんだという覚悟で準備を重ねてきました。電話を受けたとき

は「ついに来たか」と身が引き締まった」と振り返る。16時に成田空港に集まったのは、救助チームの第1陣32人。日の丸が胸に刻まれたユニホームに袖を通し、「一人でも多くの命を救いたい」と気持ちを一つにした。北京に降り立ち、国内線を乗り継いで成都へ。現地入りしたのは16日の午前2時半。休む暇もなく、約400キロ北にある青川県閬州鎮へ向か

った。警視庁警備部の齊藤昌巳さんいわく、「山が切り崩され、土砂の中に村がすっぽり埋まっていた。遠目にですが、倒壊した家屋や人の歩いている姿が見えて。被害の大きさを感じました」。団長をはじめ、数人が現場調査に入ったが、あまりに被害の状況がひどく、足も踏み入れられない状態だった。そこで中国側と話し合い、約

1時間南にある喬州鎮に活動サイトを変更。病院の集合住宅に、母親と生後2カ月の赤ちゃんが埋まっているという情報が入っていた。手作業で少しずつがれきを掘り返していく隊員たちを、不安そうに見守る近所の人たち。電気が足りないだろうと、裸電球をつなげて持ってきてくれた人もいた。しかし日が暮れるにつれて、救助活動は難航。ここで中断は

西部にある四川省。死者約7万人、負傷者約38万人、行方不明者約1万8000人を記録し、現地はたちまち混乱の渦に巻き込まれた。その悲惨な状況は、すぐにメディアを通じて世界中に伝わった。1995年の阪神・淡路大

震災を思い起こさせるような映像。JICAの国際緊急援助隊(JDR)事務局は、いつでもチームを送り出せるよう準備に取り掛かった。中国政府から正式な派遣要請があったのは、地震発生から3日後の15日正午前。警察庁、総

患者の緊急移送を手伝う医療チームの隊員(左)



北川第一中学校で、崩壊した1、2階部分に入り込み捜索する救助チームの隊員。右の階段の上から、子どもたちが不安そうに見守る



したくない。齊藤さんは「現地の機材を貸してもらえないだろうか」と提案。交渉の結果、重機を一台借りることができ、救助活動は夜を徹して行われた。「疲れというか、時間の流れを感じなかった。とにかく早く助け出してあげたかったんです」(齊藤さん)

そして、17日朝の7時25分。がれきの下に埋まっている女性の姿が――

「いたぞー！」
木材を一つ一つ取り除いていくと、わが子に覆いかぶさるように倒れている母親の姿が見えた。残念ながらもう息はなかった。遺体を丁寧に包んで家族に

引き渡し、整列して黙とうをささげる隊員たち。誰が声を掛けただけでなく、全員の弔いが一つになって生まれた行動だった。

第2陣と合流

一人でも多くの子どもを救いたい

活動も終盤に差し掛かった17日正午過ぎ、第2陣の30人と合流。次の活動サイト、北川県曲山鎮きょくざんにある北川第一中学校に向かった。移動中、全校生徒1500人のうち、まだ700人が埋まっているとの情報が入る。「こうしている今でも、助けを求めている子どもたちがたくさんいる。現場に着いてすぐに動けるよう、隊員同士で打ち合わせをしていました」と川崎市消防局の原光生さんは話す。

としての活動終了が決まった。「正直とても悔しかった。まだできることはあると……」(原さん)。

その後、JDRの活動は20日に現地入りした医療チームにバトンタッチ。約10日間、現地スタッフと連携しながら、成都市内にある四川大学华西病院で医療活動を行った。隊員のサポートにより、震災直後に出産した女性からは「将来この子に日本語を学ばせて、10年後、皆さんに『ありがとう』と伝えたい」という、胸が熱くなる言葉ももらった。

救助チーム、医療チーム合わせて、約3週間にわたったJDRの活動。「小さな女の子が



青川県喬庄鎮で母子の遺体を発見し、黙とうをささげる救助チームの隊員 ©AFP=時事

中学校に到着したのは18日午前0時前。不運にも激しい雨が降り、地盤がゆるんで危険な状況だった。人命探査装置を使って捜索活動を行ったが、反応は見られない。夜が明けて本格的に活動を開始することになった。

4階建ての校舎の1、2階部分は完全につぶれていたが、所々に少し隙間がある。生存者がいると信じ懸命に活動が続けたが、「逃げ出そうとしたのか、廊下に重なるようにして倒れている子もいました。あちこちにノートが散らばっていたりと、本当に直前まで勉強をしていたんだなど。何とも言えない気持ちになりました」(原さん)。

翌日、近くのダムが決壊する危険性があるため、救助チーム

チョコレートを持ってきたり、住民の人がカプラーメンとお湯を差し入れてくれたり……。現地の人たちの温かさが支えでした」と齊藤さん。JDRの隊員の思いは、中国の人々の心にも確かに届いたようだ。

そして震災から1年以上経った今も、JICAの復興支援は続いている。6月からは、被災者のこころのケアに携わる人材を育成する「四川大地震復興支援―こころのケア人材育成プロジェクト」がスタートした(20ページに関連記事)。

四川の人々が、1日でも早く安心した生活を取り戻せるよう、JICAは支援を継続していく方針だ。



救助犬はにおいをかぎ分け、がれきに埋もれた生存者を捜す

JDR四川派遣で初のJALチャーター便運航

JDRは、政府の派遣命令があってから、救助チームは24時間以内、医療チームは48時間以内に出発する。しかし場所によっては、飛行機の乗り継ぎが困難で、到着までに時間がかかってしまう。そこでJICAは、被災地でいち早く活動を始めることができるよう、日本航空(JAL)とチャーター便の運航に関する覚書を2006年6月に締結。何度もシミュレーションを行い、準備を進めてきた。そして08年5月、JDR史上初となるチャーター便を活用した派遣が実現した。

JALに一報が入ったのは、15日18時ごろ。中国西部大地震の救助チーム(第2陣)を、チャーター便で派遣できないかという依頼だった。「スタッフ総出で、現地の着陸許可、機材、パイロット、客室乗務員の手配などに奔走しました」とJAL東京支店の西村港さん。現地ではJAL上海支店のスタッフが成都に向き、受け入れ準備を進めた。そして16日の13時過ぎ、第2陣が無事に成都へ向けて出発。依頼から19時間後のことだった。機内では客室乗務員が「一人でも多くの命を救ってください」と激励し、隊員の士気を高めたという。

「国際線運航に実績の厚いJALだからこそできる支援であると思います」と国際営業部の西山良寛さん。「JALの特性を生かした社会活動の一つとして、これからも全面的に協力していきます」。

1秒でも早く被災地へ。チャーター便の利用により、さらに迅速な救援活動が期待できそうだ。